



## 編物復元—その2—

富山県埋蔵文化財センター

### 編物の素材・ヒノキ科の植物とは

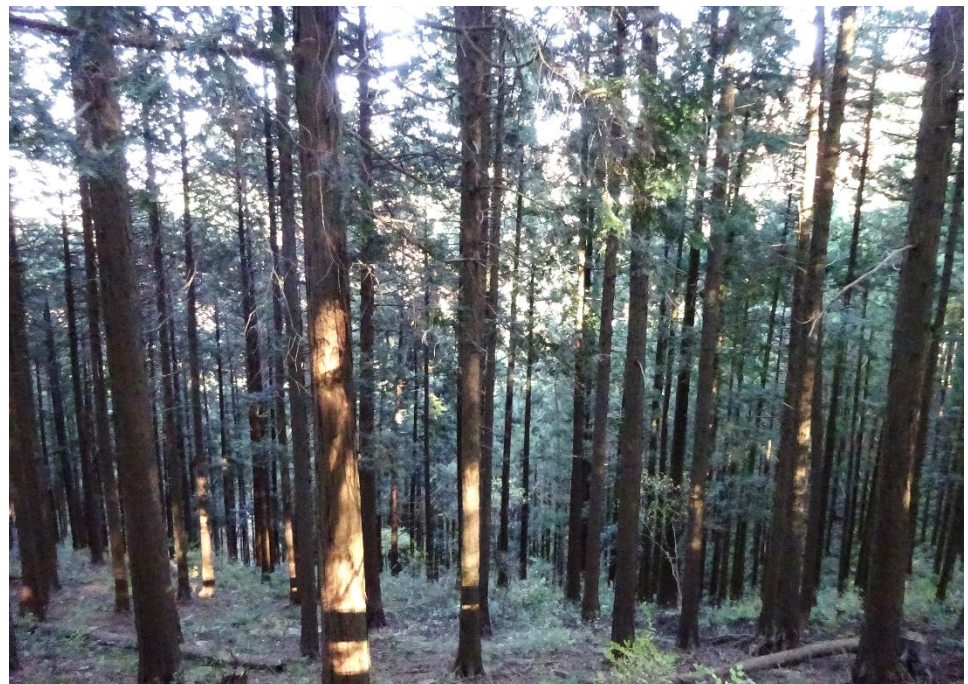
小竹貝塚から出土した編物の樹種は、縦材、横材ともに常緑針葉樹であるヒノキ科の植物と同定されています。ヒノキ科には、ヒノキのほかにアスナロ、ヒバ、サワラ、クロベ等があります。これらは材に木目が通っているので縦方向に割きやすく、またヒノキチオールという成分を含んでいるため抗菌・防虫効果が高く、耐湿性にも優れています。編物の樹種同定をした担当者からは、ヒノキ科の中でも、クロベかアスナロの可能性が高いというコメントをもらっています。

出土編物の縦の条材は幅約4mmに加工した分割材、横の条材は幅約1.5mmに裂いた内樹皮と考えられます。今回は採取が難しい太い幹ではなく、細い枝を素材としても復元作業が可能だと考え、ヒノキ科の木の枝を採取させていただける協力者を探しました。

### ヒノキを採取する

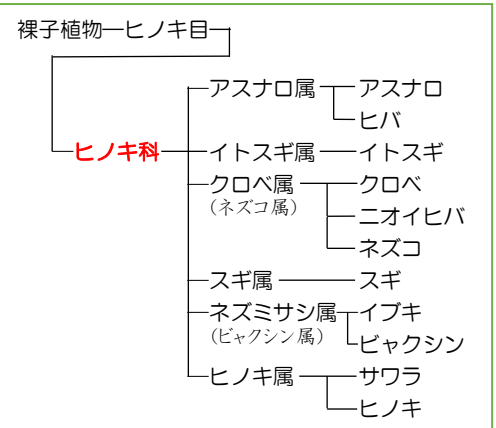
現在、ヒノキ等の樹木は国有林や私有地で計画的に植樹され、高級建築材として生産管理されています。適切に管理されている樹木は高さ数十mにもなるので、細い枝といえども素人のみの採取は危険を伴います。

今回ヒノキをご提供下さるのは、埼玉県秩父郡長瀬町在住の根岸捷男さんです。根岸さんのご協力のもと、春（4月末）と秋（11月末）の2時期にヒノキの枝を採取させていただくことになりました。春はきれいな樹皮が効率良く得られる季節、秋は枝打ちの季節です。

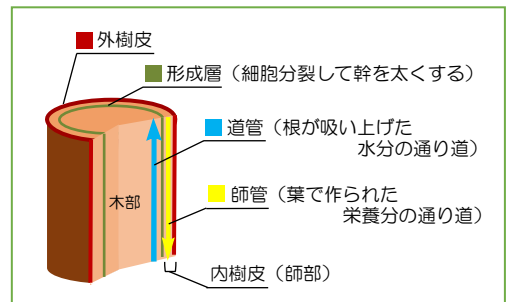


ヒノキの植樹林（埼玉県秩父郡長瀬町）

ヒノキは山地の中腹や尾根の日陰となる場所に植えられます。乾燥を好み、特に幼木は強い日差しを嫌うそうです。



ヒノキ科の主な植物



木の構造

## ヒノキ採取の季節

春～初夏の季節には、樹木の根が水をたくさん吸い上げて木が大きく育ちます。春の木の内部構造をみると、内樹皮の内側に道管という水の通り道ができています。この発達した道管が境となるので、春の木は樹皮を剥がしやすいのです。他の樹木でも同様に、例えば白樺や山桜の樹皮から民芸品を作る場合も、この時期に樹皮を採取して加工するそうです。

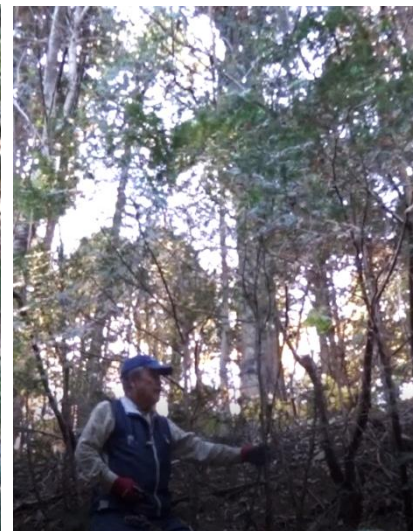
今回の編物復元でも樹皮を使うため、春の枝が必要です。ただし春～初夏に枝を切ってしまうと、吸い上げた水や養分の行き場がなくなって切り口から腐ったり病害虫がつきやすくなり、建築材として使えなくなってしまいます。どうしても春に枝を採取したい場合には、大木の切株や根元から生えてくるひこばえや建築材としない予定の木を選び、下の方の枝を数本だけ切り落とします。

枝打ちや木材出荷のための伐採は、寒くなって木の成長が止まる秋から冬の初め頃に行います。秋の木は養分を多く蓄えており、果物に例えると甘く食べ頃になっているそうです。ただし、秋に切った枝からは、樹皮をきれいに剥がすことはできません。

縄文人は植物の成長サイクルを熟知し、春に枝を伐採する場合でも樹木本体に影響を及ぼさない方法をとっていたことがわかります。



春に枝を採取したヒノキの木  
建築材にならない細い木を選び、下の方の枝を数本切り落とします。



ヒノキの枝を採取する  
2020年11月21日撮影

## 枝の採取後は…

ヒノキの枝は乾燥しないよう袋に入れ、なるべく早く水に浸けます。乾燥が進むと、樹皮が芯にくっついて剥がれなくなってしまいます。

2020年4月末～6月は新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言が出されたため採取に立ち会えず、根岸さんをお願いして、ヒノキの枝を埼玉から宅急便で送ってもらいました。これを加工して小竹貝塚の編物を復元していきます。

(朝田亜紀子)



ヒノキの枝  
2020年4月28日に伐採し、宅急便で送ってもらったヒノキの枝です。  
長さ52cm～1m20cm、根本の太さ0.8～1.5cmの枝が18本あります。